

「紅梅の御方」論：『源氏物語』における紫の上の 遺志の継承をめぐって

宮崎，裕子
九州大学専門研究院

<https://doi.org/10.15017/19776>

出版情報：語文研究. 108/109, pp.14-26, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「紅梅の御方」論

——『源氏物語』における紫の上の遺志の継承をめぐる——

宮 崎 裕 子

はじめに

『源氏物語』の紅梅巻には、「決して結婚はしない」と思定めている女性——宮の御方が登場する。光源氏の最も親密な弟であった蛭兵部卿宮を父に、紫の上の姪真木柱を母に持つ彼女は、紅梅巻以降は宿木巻にただ一度その名が見えるのみで、取り立てて目立つ扱いもされず、ほとんど注目されることのなかつた人物である。

しかし、紫の上と結びつく紅梅のイメージを負った「紅梅の御方」との呼び名を与えられ、また、浮舟に薫を拒絶させて終幕を迎える光源氏死後の物語の始発部に、不婚を貫く意志を表明する女性が登場する意義は、決して軽いものではな

いだろう。

本稿では、宮の御方が「紅梅」の名を冠された意味合いと、その彼女が物語中で担う役割を明らかにしたい。

—

父宮の死後、母親の再婚相手である按察使大納言（紅梅大納言）邸に住まう宮の御方は、大納言の故北の方腹の大君・中君姉妹と仲睦まじく暮らしていた。

東の姫君（＝宮ノ御方）も、（大君・中君ト）うとくしくかたみにもてなし給はで、夜くは一とところに御殿籠り、よろづの御こと習ひ、はかなき御遊びわざをも、

此方（＝宮ノ御方）を師のやうに思ひきこえてぞ誰も習ひ遊び給ける。物はちを世の常ならずし給て、母北の方にだに、さやかにはおさく／＼さし向かひたてまつり給はず。かたはなるまでもてなし給物から、心ばへけはひの埋れたるさまならず、あい行づき給へること、はた、人よりすぐれ給へり。

（紅梅卷④235頁^{注1}）

宮の御方と大君・中君姉妹は、毎夜同じ部屋で眠り、様々な習い事も、ちよつとした遊び事も、大君と中君は宮の御方を師匠のように思つて一緒に過ごしていた。宮の御方は人並はずれた恥ずかしがりで、母親にさえはつきりと顔を見せることが滅多にない程だが、尋常ならざるほどに控えめに振る舞つてはいるものの、気性や雰囲気は陰気ではなく、人を惹きつける魅力は他の誰よりも優っていた、とする。

紅梅大納言は、宮の御方と直に顔を合わせたことがなく、継娘の姿を垣間見る隙さえ皆無なのだが、御簾越しの対面で実際に彼女の声を聞き、気配を感じて、

御いらへなどほのかに聞こえ給、御声けはひなどあてにをかしう、さまかたち思ひやられて、哀におぼゆる人の御ありさまなり。わが御姫君たちを、人に劣らじと思お

これど、此君にえしもまさらずやあらむ…。

（紅梅卷④236頁）

と、東宮のもとに入内させた大君や、並みの臣下と結婚させるのは惜しい程の中君よりも優れた女性のようだと感歎する。また、彼は、光源氏の姪にあたる彼女の琵琶の音色を、光源氏から伝授を受けた当代の名手夕霧の調べに似ていると賞賛している。このように、宮の御方は、后がねと期待されている姫君たちを凌駕する教養や才覚を兼ね備えた女性なのである。

この宮の御方の存在に匂宮は心惹かれるのだが、「結婚はしない」と思い定めている彼女は、匂宮からの文にも関心を示さない。真木柱も娘の結婚に消極的で、継娘を実子たちと分け隔てなく扱う大納言の、宮の御方に相応しい婿が決まったら世話をしようという申し出に、宮の御方は世間並みの結婚を諦めているから、母親に死に別れた後は、出家してでも世の物笑いの種にならずに過ごしてほしいものだ、と応えている。

「さらにさやうの世づきたるさま思ひ立つべきにもあらぬけしきなれば、中／＼ならむ事は心ぐるしかるべし。

御宿世にまかせて、世にあらむかぎりは見たてまつらむ。後ぞ哀にうしろめたけれど、世を背く方にてても、をのづから人笑へにあはつけきことなくて過し給はなん」などうち泣きて、(宮ノ御方ノ) 御心ばせの思ふやうなることをぞ聞こえ給。

(紅梅卷④ 235頁)

真木柱としても、生涯独身のままで過ごすであろう娘の行く末は、やはり不安ではあるが、「申し分のない性格である——御心ばせの思ふやうなる——」宮の御方には、母親の庇護を失つても宮家の姫としての体面を保つていけるだけの才覚がある、と判断しているようである。

宮の御方が頑なに結婚を拒む理由については、一切言及されておらず、ただ、彼女の「人に見え」ない——結婚しない——という意志が示されるだけである。

宮の御方は、物おぼし知るほどに、ねびまさり給へれば、何事も見知り、聞きとゞめ給はぬにはあらねど、人に見え、世づきたらむありさまは、さらにとおぼし離れたり。

(紅梅卷④ 243頁)

物の道理を十分に弁え、あらゆる事を見聞している宮の御方

は、決して世間知らずではあるまい。夫となる男性の後ろ盾を得ないことによる様々な不利益を承知の上で、あえて、結婚しないことを選択したはずである。そして、そう決意した宮の御方の内面は全く語られないまま、彼女が不婚を貫くことができるだけの条件は揃えられている。

そもそも、父宮をすでに亡くしている宮の御方には、「式部卿宮を母方の曾祖父に、今上帝の伯父に当たる故太政大臣(髭黒)を祖父に持つ、兵部卿宮家の姫君」という身分に釣り合うような縁談の申し入れがない。匂宮は身分に相応しい求婚者ではあるが、大納言が彼を実子である中君の婿にと望んでいることと、匂宮自身の浮気な性分が頼りにならないことから、真木柱も宮の御方を匂宮に縁付ける事を諦めざるを得ない。

父宮を亡くしているので身分に相応しい結婚は難しく、後見を務める母の死後にも身分相応の体面を保つていけるだけの才覚の持ち主らしい宮の御方ならば、不名誉な結婚で家名を汚すよりは、独身を通した方が世の聞こえも良い。不如意な生活ゆえに女房たちから結婚を勧められた宇治の八の宮家の大君・中君とは異なり、父方・母方から多くの財産を受け継いだ宮の御方の暮らしぶりは、

大方にうち思ふ程は、父宮のおはせぬ心ぐるしきやうなれど、こなたかなたの御宝物多くなどして、うちくの儀式ありさまなど心にくく、け高くなどもてなして、けはひあらまほしくおはす。
(紅梅卷④233頁)

という有様で、宮家の姫として申し分のないものである。

真木柱を正妻とした按察使大納言は、継娘を実子たちと分け隔てなく扱い、大納言家の嫡子たる大夫の君は、宮の御方の同母弟で、三人の姉たちの中でも高貴な女性として理想的な重々しさを備えた宮の御方を特に尊重し、慕っている。有力貴族の嫡流で将来宮廷の中枢にしかるべき地位を占めるはずの大夫の君の最愛の姉である宮の御方の生活は、後々も安泰であろうと推し量られる。

これだけの条件を備えて、宮の御方は、自身の心情を一言たりとも語ることなしに、匂宮を拒絶する。宿木巻では、宇治の中君を二条院に迎え、夕霧の六の君との結婚も承諾した匂宮が、

あだなる御心なれば、かの按察使の大納言の紅梅の御方をも猶おぼし絶えず、花紅葉につけてものの給ひわたりつゝ、いづれをもゆかしくはおぼしけり。(⑤34頁)

と、依然として宮の御方への執心を抱き続けていることが記されているのだが、それ以降の宮の御方の動向については言及されておらず、結局のところ彼女が匂宮に応じることはなかったであろう。

宮の御方がなぜ「人に見え」まいと決意したのか、その理由は明らかにされないまま、『源氏物語』は彼女のような生き方を選択することの出来なかつた八の宮家の娘たち——宮の御方の従姉妹たち——の、決して幸せとは言えない生き様を語り継いで行く。彼女の選択の賢明さを実証するかのよう

二

『栄花物語』に、藤原道兼の娘が故関白の息女に相応しい結婚も出来ないまま、道長の娘威子の女房となる経緯が記され、『源氏物語』でも、蜻蛉式部卿宮の娘である宮の君が、父の死後、継母によって馬頭と結婚させられそうになり、それを気の毒に思った明石中宮の配慮で女一の宮に仕える女房となつたように、父親の庇護を亡くした女性が父の存命中と変わらぬ自身の出自に見合う結婚相手を得ることは容易ではなく、上流貴族や親王の娘ともなれば、家名に傷を付けぬよ

う、如何に身を処していくかは、当然ながら慎重にならざるを得ない。

宇治の八の宮は、

生まれたるいゝのほど、をきてのまゝにもてなしたらおなむ、聞き耳にも、わが心ちにも過ちなくはおほゆべき。

(椎本卷④352頁)

と、娘の大君・中君には高貴な出自に似付かわしくない相手との仲を取り持たぬよう、女房たちに言い遣していたし、真木柱も、宮の御方には出家してでも物笑いの種になるような軽々しい振る舞いは避けて欲しい、と案じていた。

それでも、現在の安定と将来の安泰とが保証されている宮の御方には、結婚をしない——夫の庇護を受けない——という選択の道が開けていたが、しつかりした後ろ盾を持たない、父宮を亡くした親王の娘たちは、身の処し方に悩むことになる。

八の宮が死去し、薫の後見を頼みとする宮家の女房たちは、京を迎えたいと言う薫に靡かない大君を説き伏せようとするが、大君は肯んぜず、両親のどちらかでも存命であったならばと、親の庇護を失った我が身を嘆く。

いかにもてなすべき身にかは、一ところおはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて、宿世といふなる方につけて、身を心ともせぬ世なれば、みな例のことにてこそは、人笑へなる咎をも隠すなれ…。

(総角卷④400頁)

親の勧めで結婚したのであれば、たとえ不幸な結婚生活を送ることになったとしても、そんな例はいくらでもあるのだから、世に恥を晒すことにはならない。一方で、本人が自らの判断で相手を選び、その結果不幸に陥ってしまったえば、それは当人の浅慮の挙げ句に引き起こされた事態として、「人笑へ」となる。女三の宮の行く末を案じ、婿選びに苦慮する朱雀院の述懐もそのことを如実に物語っている。

すべてあしくもよくも、さるべき人の心にゆるしをきたるまゝにて世中を過ぐすは、宿世くにて、後の世に衰へあるときも、身づからのあやまちにはならず、…。

(若菜上卷③218頁)

親やしかるべき人の認めた正式な結婚であれば、夫婦仲が将来どうなつたとしても本人の「あやまち」にはならない。だ

からこそ大君は、自分が中君の親代わりとなつて薫に縁付け、妹には晴れがましい結婚をさせたいと切望する。(注2)

しかし、薫に零落した無品親王の遺児を正妻とする意志などあるはずもなく、大君の願ひとは裏腹に、

かく顕証にこれかれにも口入れさせず、忍びやかに、いつありけむこともなくもてなしてこそ……。

(総角巻④401頁)

と、大君との仲をあくまでも密やかな関係として始めようと目論見む。

この薫の策略により中君に匂宮が通うようになるが、身分柄思うように宇治を訪れることができない宮の間遠な訪問を、大君は宮の心の頼りなさゆえと失望し、「人笑へ」の種をこれ以上増やして宮家の恥を重ねないように、自分は決して薫に応じまいと思ひ定める。そんな中、匂宮と夕霧の六の君との婚儀の噂が大君の耳に届き、宮にとつて中君はれつきとした正妻を迎えるまでの仮初めの相手だつたに違ひない、と絶望した彼女は、心労のあまり病臥する。

そんな大君を薫は近しく看取り、その誠意は大君にも伝わのだが、彼女は彼の真情を察した上で、彼の申し出を受け

てしまえば、お互いに幻滅する時が来るかもしれない。だから、もしも生き長らえたとしたら病を口実に落飾してしまおう。それこそがお互いの親愛の情を保ち続ける方策だろう、と心を定める。

なをかゝるつゝぬでいかで亡せなむ、この君のかくそゝめて、残りなくなりぬるを、いまはもて離れむ方なし、さりとて、かうをろかならず見ゆる心ばえの、みをとりにしてわれも人も見えむが、心やすからずつかるべきこと、もし命しゐてとまらば、やまゐに事つけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ長き心もかたみに見はつべきわざなれ、……。

(総角巻④455頁)

こう思ひ定めた大君を、匂宮と夕霧の六の君との婚儀が決定したことで自身の不安定な立場を思ひ知らされた中君は、憂悶の裡に賞賛する。中君には、正妻となった大臣家の娘に気圧される自分の境遇は、八の宮家の面目を失わせるものと憂慮され、それにつけても、頑なに薫を退け続けた大君の思慮深さが思ひ起こされたのである。

故姫君の、いとしどけなげに物はかなきさまにのみ、何

事もおぼしの給しかど、心の底のづしやかなるところは
こよなくもおはしけるかな、中納言の君の、いまに忘る
べき世なく嘆きわたり給めれど、もし世におはせましか
ば、又かやうにおぼすことはありもやせまし、それをい
と深いかでさはあらじと思入り給て、とさまかうさま
にもて離れん事をおぼして、かたちをも変へてんとし給
しぞかし、かならずさるさまにてぞおはせまし、いまま
に、いかにをもりかなる御心をきてならまし、…。

(宿木巻⑤36頁)

薫は今でも大君を忘れられずにいるが、もしも彼女が生きて
いたとすれば、これほど深く彼女を思い続けはしなかつただ
ろう。それを察していたからこそ、大君は薫の申し出を受け
入れなかつたのだし、存命であつたとしたら、きつと出家し
てでも薫を拒み通し、宮家の名誉を守つたに違いない、とい
うのである。

物語はこの少し前に、中君を嘆かせることになる六の君と
の婚姻を承諾した匂宮が、依然として宮の御方にも執心して
いることを語っており、それが宮の御方を「紅梅の御方」と
呼ぶ前掲箇所である。

そもそも、宮の御方に関心を寄せて懸想文を贈り、彼女の

異父弟大夫の君に仲立ちを依頼するのと時を同じくして、匂
宮は宇治の中君に通い始めていたのであつて、仮に宮の御方
が彼の申し入れを受け入れていたとしたら、中君の嘆きはそ
のまま宮の御方の嘆きであり得たかもしれないのである。ひ
たすらに宮家への面伏せを憂える中君の、

げに心あらむ人は、数ならぬ身を知らでまじらふべき世
にもあらざりけり…。

(宿木巻⑤62頁)

という慨嘆は、自身の境遇を客観的に判断したと思われる宮
の御方の賢明さをも証明しているかのようだ。

匂宮からの申し入れについて苦慮する真木柱は、

何かは、人(匂宮)の御ありさま、などかは、さても
見たてまつらまほしう、生ひ先遠くなどは見えさせ給に
など、北方思ほしよる時くあれど、(匂宮ハ)いとい
たう色めき給て、通ひ給ふ忍び所多く、八の宮の姫君に
も御心ざしの浅からで、いとしげうまうでありき給、頼
もしげなき御心のあだくしさなども、いとゞつゝまし
ければ、まめやかに思ほし絶えたる…。

(紅梅巻④243頁)

と、宮の御方を将来有望な匂宮に嫁がせたいと考えなくもないのだが、浮気な性分の匂宮が、複数の通い所を渡り歩き、中君の居る宇治へも足繁く通っていることから、宮との縁組は断念せざるを得ない。

ここで、真木柱が匂宮の「頼もしげなき御心」を問題にしているのは、おそらく、宮の御方が匂宮の正妻にはなれないことを前提としてであろう。東宮候補である匂宮は複数の妻妾を持つはずだが、正妻として迎えられるのは宮の母明石の中宮の外戚である夕霧の娘以外には考え難く、宮の御方が不動の正妻の地位を獲得することは有り得ない。

後見人となる母親がいる宮の御方は、正式な婚儀を行い、正妻の地位を得ることが出来るのだが、夕霧を外戚とする匂宮の正妻は、夕霧の娘でなければ明石の中宮も認めまい。将来匂宮が帝位に即けば、宮の御方は父の後ろ盾を持たずに後宮で妍を競う羽目になる。継父である大納言の養女となつて、その後ろ盾を得れば、権門の娘たちの間に伍することは可能だが、藤原氏から皇后が立つという春日の神の託宣を自分の代で実現させたいと望む大納言が、皇統に連なる宮の御方を養女として匂宮に娶せるはずもない。立場が不安定な妾妻となるからこそ、匂宮の浮気な性分が問題とされるのであり、匂宮の申し出を承諾しないのは、父親王のいない宮の御方が

権門の娘たちに圧倒されてしまうことを案じての判断なのだろう。

ただし、これはあくまでも真木柱の思惑であつて、「人に見え、世づきたらむありさまは、さらに」と思い定めている宮の御方本人には、正妻であろうと妾妻であろうと、誰かに縁付く意志はないようだ。宮の御方が回避したのは、匂宮の正妻になれない「面伏せ」ではなく、「人に見え」ること、つまりは、この世の中のあらゆる男性との関わりである。

こうした「人に見え」ることを拒否する宮の御方の性格が、大君に受け継がれるという指摘もある（『日本古典文学大系』）。しかし、大君が薫を受け入れることなく世を去つたのは、庇護者を喪つた彼女が貴顕の正妻とはなれず、親王の娘という出自に相応しい結婚が不可能なためであり、男性との関わりを一切拒絶している宮の御方と同様の境地に辿り着くのは、大君の形代として登場する浮舟の方なのである。

薫と匂宮との間で板挟みになつた浮舟は、苦惱の果てに自死を図り、小野の尼君たちによつて助けられるが、尼君のかつての娘婿である中将と縁付けられそうになり、遂に出家の本懐を遂げる。父である八の宮に認知されなかつたゆえに軽んじられ、高貴な男性たちに振り回されて疲弊した拳げ匂に世を捨てた浮舟だが、

世にありて、いかにもいかにも人に見えんこそ、それにつけてぞむかしのこと思出でらるべき、さやうの筋は思絶えて忘れなん…。

(手習巻⑤34頁)

と決意して落飾する彼女が黒髪とともに断ち切ったのは、男性と相對さざるを得ない女性としての我が身であった。浮舟の生存を知って迎えに来た薫を、「昔のことは思い出せない」として受け入れない彼女が拒むのは、薫その人のみならず、彼とともに彼女を追い詰めた匂宮、そして、この世の中で「人に見え」ることそのものである。

所詮この世は、女に対して「人に見え」ることを要求し続ける「憂き世」ではない。薫・匂宮との確執から逃れて更にまた、中将との縁組を望まれた浮舟は、そうした事実を痛感させられた。この世に在る限りそれから逃れるすべはないのなら、この「憂き世」を捨ててしまうより他の選択肢は、浮舟に残されていなかった。

紅梅巻も含めた匂宮三帖の成立に関しては、別作者説など諸説があるが、少なくとも『源氏物語』として現在に伝えられるひとまとまりの物語において、ただひたすらに「人に見え」ることを拒む宮の御方が登場する紅梅巻と同時進行の物語と位置づけられて開始した宇治十帖は、彼女と同じく匂宮

の庇護を失った大君と中君とが、薫と匂宮との関わりの中で翻弄される悲哀を語り、やがて、大君の形代として出現した浮舟に、「人に見え」ることを拒絶させて終幕を迎える。浮舟が苦悩の果てに到達した境地は、宮の御方によってすでに示されていたのであり、物語の帰結点を暗示するかのようによに登場する彼女の存在意義は、軽いものでは決してない。

三

そうした宮の御方の存在の重要性を示すのが、「紅梅の御方」という呼称であろう。三田村雅子氏が指摘されたように、『源氏物語』において、色も香も兼備した紅梅は、紫の上のイメージと結びつけられる花であり、「梅花の美」「秋山虔・木村正中・清水好子編『講座 源氏物語の世界』第六集」〈有斐閣、一九八一年〉所収)、物語中でその紅梅の名を冠される女性が、単なる点景人物であるとは思えない。

宮の御方が宿木巻で「按察使の大納言の紅梅の御方」(前掲箇所)と呼ばれているのは、紅梅巻において按察使大納言が匂宮に奉った紅梅が宮の御方の「御前の花」(紅梅巻④238頁)であったことに由来する。

継娘である宮の御方のもとを訪れていた按察使大納言は、

そこに咲き誇る見事な紅梅に目を留めて、自分の実の娘中君との縁談をほめかす手紙とともにその枝を、童殿上している息子大夫の君に持たせて匂宮に贈った。宮の御方に関心のある匂宮は、彼女の同母弟である大夫の君に密かな取りなしを依頼しており、中君には興味を示さないものの、大納言から献上された世の常ならぬ色香を併せ持つ紅梅を賞玩する。(注)

枝のさま、花房、色も香も世の常ならず。「園に匂へる紅の、色にとられて香なん白き梅には劣れると言ふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、御心とゞめ給ふ花なれば、かひありてもてはやし給。

(紅梅卷④240頁)

匂宮が紅梅の花を格別に好むのは、生前の紫の上に二条院の紅梅の花守りを遺言されたからで、幼い匂宮は、

「ぼんこのたまひしかば」とて、対の御前の紅梅はいととりわきて後見ありき給ふ…。(幻巻④191頁)

と、紫の上遺愛の「御前の紅梅」を大切に世話していた。匂宮にとって紅梅は紫の上の思い出に繋がる特別な思い入れ

のある花であり、そして、その彼に「御前の」紅梅が奉られたがゆえに「紅梅の御方」と呼ばれる宮の御方は、紫の上の血筋に連なる女性なのでもあった。

更にもう一つ、宮の御方と紅梅との関連について看過しえないのは、彼女が光源氏の弟蛭兵部卿宮の娘だという点である。

紫の上が死去した翌春、蛭兵部卿宮の来訪を受けた光源氏は、喪が明けても一向に癒えることのない喪失感を吐露し、ともに紫の上を哀惜する蛭兵部卿宮が紅梅の下に佇む姿を目の当たりにして、紫の上亡き後その花を愛するのはこの宮をおいて他にないとの感慨を抱く。

(光源氏)
わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪ね来つらん

宮、うち涙ぐみ給て、
(蛭兵部卿宮)
香をとめて来つるかひなく大方の花のたよると言ひやなすべき

紅梅の下に歩み出で給へる御さまのいとなつかしきにぞ、これよりほかに見はやすべき人なくやと見給へる。花はほのかにひらけさしつゝ、おかしきほどの匂なり。

(幻巻④186頁)

色も香も兼ね備えた、紫の上を偲ぶよすがの紅梅。その紅梅の名を与えられ「紅梅の御方」と呼ばれる宮の御方が、紫の上の死後その遺愛の花の真価を理解できるのはこの人だけとされた蛭兵部卿宮と、紫の上の姪に当たる真木柱との間に生まれた女性と設定されているのは、宮の御方と紫の上との繋がりを強く意識したためではあるまいか。

このように紫の上のイメージを受け継ぐ人物として宮の御方に焦点を当てた時、おのずと想起されるのは、夕霧と落葉の宮との一件に触発された、次のような紫の上の慨嘆である。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、物のあはれ、おりおかしき事をも見知らぬさまに引き入りしづみなどすれば、何につけてか世に経るはえぐしさも常なき世のつれぐをも慰むべきぞは、大方、物の心を知らず、言ふかひなきものにならひたらむも、生ほし立てけむ親もいとくちおしかるべきものにはあらずや、心のみ籠めて、無言太子とか、小ほうしばらのかなしきことにするむかしのたとひのやうに、あしきことよきことを思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よき程にはいかに保つべきぞ、とおぼしめぐらすも、いまはたゞ女一の宮の御

ためなり。

(夕霧卷④132〜133頁)

光源氏最愛の女性でありながら、正妻になれなかったがために、朝顔前齋院や女三の宮によってその立場を脅かされ続けてきた紫の上が垣間見せる心の深淵には、男性に翻弄され、思うままに生きることを許されぬ女という存在への絶望と、自分の人生に対する諦念とが横たわっている。女性の生き難さを嘆じる紫の上が、ものの情趣を解さないかのように引き籠もり、事の善悪を弁えながらも胸に秘めたまま過すのはつまらない、と女性の生き方に思いを巡らすのは、ひとえに女一の宮のためであり、そこには、自分の人生は決して幸せなものではなかったという認識が潜んでいる。ひたすらに女一の宮の行く末に心を砕く紫の上は、自らには不可能であった別の生き方の可能性を、生い立ち行く女一の宮の将来に託したのかも知れない。その想念の彼方に「男の要らぬ世界」(清水好子『源氏の女君(増補版)』『塙新書、一九六七年』)を予想させた紫の上の望みは叶えられたのか、成人した女一の宮は、匂宮にとつても薫にとつても手の届かぬ憧憬の対象となり、選りすぐりの才氣溢れる女官・女房たちに傳かれて、優雅に華やかに暮らす。

宇治十帖における女一の宮のそうした在り様こそが、紫の

上の思い描く理想であったのかも知れない。だが、男性によって不幸に陥れることのない女一の宮の理想的とも言える生活は、独身が通例の第一皇女に宿命づけられたものであって、ただ慣例に則っただけのその在り方では、女の生き方を追求しようとした紫の上の遺志を具現化するには不十分であった。あくまでも物語は自分の意志で能動的に不婚を選択する女性の存在を必要とし、紫の上に付与された紅梅のイメージのみならず、彼女の秘められた遺志をも受け継ぐ人物として、「紅梅の御方」という呼称を与えられる女性——宮の御方——が登場するのである。

匂宮に献上された、宮の御方の「御前の」紅梅は、紫の上のイメージを受け継ぐ宮の御方自身を象徴する花でもある。それが意中の女性の「御前の花」であることを知らないまま、色も香も併せ持つ紅梅を手に取り讚美する匂宮は、「紅梅の御方」その人を手に入れることはできない。類い稀なる紅梅に象徴される彼女は、彼のみならず、すべての男性に「見え」ることを拒絶しているからである。

后妃となるべき女性たちに勝るとも劣らない知性や教養を備え、「人に見え」ることを拒み、継父である按察使大納言にも迎合しない宮の御方は、紫の上が味わった苦渋とは無縁なまま、女房たちに傳かれる宮家の姫君として理想的な日々

を送るに違いない。それはおそらく、男性に翻弄される女としての不幸を甘受させられ、自身の意志さえも剥奪されたかのような「言ふかひなき」生を生きた紫の上の、見果てぬ夢だったのではあるまいか。

おわりに

このように、紫の上から紅梅のイメージを受け継ぎ、その遺志を体现するのが、「紅梅」の名を冠された宮の御方であるのだが、彼女の登場回数は少なく、読者に与える印象も薄いためか、物語中で「紅梅の御方」と呼ばれたにもかかわらず、その呼称が読者の間に定着することもなかった。しかしながら、「人に見え」まいと思いつき定め、義理の姉妹と馴れ親しむ、つまり、男性と関わることを拒み、同性を相手に深い結びつきを求める宮の御方の生き方は、後代へ受け継がれ、中世王朝物語において、男性との関わりよりも同性との深い結びつきを重んじ、心を寄せ合う相手として積極的に同性を求めた女性たちが集う〈女たちの世界〉へと結実して行く（拙稿「女たちの世界——『在明の別』が描いた〈女性同士の夫婦〉から」）「辛島正雄・妹尾好信編『中世王朝物語の新研究——物語の変容を考える——』〈新典社、二〇〇七年〉」所

収)。

同性との深い結びつきを求める女性たちが志向する「へ女たちの世界」という趣向は、男女の結びつきよりも女性同士の親しみ合いの方に重きを置く女性を主人公に据えた『在明の別』で本格的に開花し、天上界に男性を排除した女性たちだけの樂園を創出した『我身にたどる姫君』で頂点を迎える。

『在明の別』の成立は十二世紀中頃から十三世紀初頭にかけてと推定され、『我身にたどる姫君』は十三世紀半ばに成立した物語である。『源氏物語』から時を経て、へ女たちの世界を築き上げた中世王朝物語は新しい人間模様を描き出しに行くのだが、その萌芽は『源氏物語』にすでに内包されていたという事実を、「紅梅の御方」の存在から確かに見て取ることができるのである。

注

注1 『源氏物語』の引用は、「新日本古典文学大系」による。

注2 大君の結婚拒否については、従来様々な論が提示されてきたが、工藤重矩氏の指摘通り(『平安朝の結婚制度と文学』風間書房、一九九四年)、薫の妾となって宮家の名誉に傷を付けることを避けたかったのだろう。

注3 この時按察使大納言は、

心ありて風のにはほす園の梅にまづ鶯のとはずやあるべき
(紅梅卷④ 239頁)

と、紅梅を中君によそえた歌を添える。これを受け取った匂宮は、自分の掌中にある世の常ならぬ見事な紅梅の一枝が、実は宮の御方の「御前の花」だと知るべくもなく、

花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過ぐさましやは
(紅梅卷④ 241頁)

と、その「花の香」に誘われることを拒む。勿論匂宮は中君との縁談を断ったつもりなのだが、我知らぬうちに、意中の女性の「御前の」花の香に誘われることをも拒んでいたことになる。ここに描かれたすれ違いによって、匂宮と宮の御方とが最後まで相見えることはない、ということが暗示されているのであろう。

(みやざき ゆうこ・本学専門研究員)